

福 井 県 医 師 会

だより

第681号 平成30年(2018)3月



寒中望春

福井市 平野 治和

表紙写真説明：寒中望春

福井市 平野 治和

春を待つ気分でグリーンの抽象画を画いてみました。私の基本は、厚紙の上に白色の下地を塗り、その上にアクリル絵の具をのせていきます。あるイメージを元に、絵の具を塗り、消し、削り、また塗る等の作業をします。イメージが湧かないと、下地をじっと見つめ続けますが、うとうととしてきます。

## 醫 縫 録

# 保育、教育機関と小児医療の協調

周産期・乳児保健・学校保健担当理事 笠原善仁



前の県医師会の理事の中には小児科医がひとりも入っておられないとのことで、春木伸一前小児科医会会長の後押しと福井市医師会副会長柏原謙悟先生の御尽力で福井市医師会推薦の形で平成29年6月から福井県医師会の周産期・乳児保健・学校保健担当理事を務めさせていただいております。まだまだ、医師会事業に貢献できるところまで至っておりませんが、今後も医師会事業で小児科関連、特に周産期・乳児保健・学校保健で会員の皆様をお願いすることもあるかと思っておりますのでよろしくお願いいたします。

私は金沢大学小児科入局後、当時佐藤保助教授がチーフであった小児内分泌グループに属しましたが、当時の谷口昂教授がカナダから1型糖尿病を自然発症するモデルラット（BBラット）とまだ珍しかった抗ラットリンパ球単クローン抗体を貰い受け、1型糖尿病の自己免疫異常の解析研究をなささいとのことで、5年前に開業するまで1型糖尿病の外来や臨床研究に携わってきました。皆様ご存知のように1型糖尿病はウイルス感染などを契機に自己免疫的に膵ランゲルハンス氏島炎が発症し、インスリン枯渇に至る疾患で、インスリン治療が必須となります。基本的にインスリン治療以外は生活の制限は必要なく、通常の子供達と同じ生活も可能で、パイロット以外の就業制限もありません（アメリカではパイロットも就業可能）。金沢大学病院退職まで40名近くの患者様、長い方では30年近くお付き合いさせて頂きました。発症直後、多くの方（家族も含め）はショックからなかなか受容できずに苦しまれる方も多いのですが、医療機関や他の患者家族、DMキャンパススタッフからのサポートで力強く生活できるようになります。

今から15～6年前の2月ごろ5歳で発症した男の子のお母さんから外来に連絡がありました。4月から小学校入学に関して子供がインスリン治療をしていること、時に低血糖になる可能性があり捕食としてブドウ糖投与が必要になること等を、

入学予定の小学校に説明に行かれたところ、教頭先生から「普通学級で問題があったら面倒を見れないから特殊学級に入って下さい」と返答されたとのことでした。医療関係者から見れば明らかに言語道断の対処と思われますし、私から学校、教育委員会へ相談し、4月からこの子は普通に小学校へ登校可能となりました。これ以外にもDM発症後に今まで通園していた保育園（残念なことに外科系医師が経営）への通園拒否もありましたし、同様の保育、教育機関からの人権侵害ともとれる対処事例は小児内分泌学会の調査で全国各地で多数報告されています。

小児期の疾病については、以前に認められた多くの細菌・ウイルス感染症は能動免疫（ワクチン）によりその発症率は劇的に減少しつつあります（幸か不幸か現在の小児科研修医は典型的麻疹や細菌性膿胸、髄膜炎などを実際臨床経験したことのない方が多くを占めます）。一方、アレルギー疾患、発達障害、小児発症の生活習慣病、在宅医療が必要な方を含め、軽症から重症も含め慢性疾患を有する子供への対応機会が保育、教育機関でも多くなってきています。残念ながら医療側からすると明らかにおかしき過剰な対処が少なくないようです。正しい知識が啓蒙されていないことが原因の根幹とされていますが、一方、保育、教育機関から見ると問題が起こることに恐怖を抱いて、間違っただけあるいは侵害とも思われる対処も、問題が発生しなければよしとする風潮があるのが現状ではないでしょうか？このような問題ある対処を少しでも是正するのも医師会活動でも必要と思われます。また、多くの医師会の先生方も園医や学校医をされていると思いますが、なるべく現場とのより良いコミュニケーションとご指導をお願いしたいと思います。